

外国につながる人の母語学習とその支援

— 母語・継承語スピーチ発表会が目指すもの —

舟橋 宏代¹

要旨

鈴鹿大学は、外国につながる人の母語学習を間接的に支援するために、「外国につながる人の母語・継承語スピーチ発表会」を2015年から開催している。外国につながる人を、グローバル社会で活躍が期待される人材として育成するためには、母語の運用能力を保持・発展させていくことが必要である。大学という場で母語によるスピーチを発表する場を作り、外国につながる人が、友人と学び合い、学校の教員だけでなく、家族や周囲の大人の支援を受けながら、母語のブラッシュアップをする機会を提供することを企図した。この発表会は、外国につながる人の発表機会であると同時に、地域の日本人にとっては、外国につながる人が自らを母語で表現する場に立ち会う機会でもある。

キーワード

外国につながる、母語学習、間接的支援

1. はじめに

2016年12月末現在、三重県内には4万3445人余りの外国人住民が居住しており、県内総人口に占める割合は2.36%⁽¹⁾である。鈴鹿市は外国人住民数7,251人、市内総人口に占める割合3.62%と、三重県内において3番目に外国人住民が多く、総人口に対して外国人住民が高い比率を占める。

鈴鹿大学は、学部在学生407名中188名⁽²⁾が外国の教育課程12年以上を修了し、学業のために日本にやってきた「留学生」であり、在学生の約46%を占める。鈴鹿大学に在籍している外国人学生はこれら留学生だけではない。扶養家族として子どものころ来日、または日本で生まれ育ち、日本の高校を卒業した「外国につながる学生」が、各学年10名前後在籍しており、留学生対象の日本語科目を履修することが可能である。留学生対象の日本語科目で外国につながる学生を交えた教室運営を行う中で、外国につながる学生の背景や学習条件の中に留学生とは異なるものがあり、従来とは違う形での支援が必要であると考えられるようになった。

¹ 国際人間科学部国際学科 日本語教育 (Japanese Language Teaching)

本稿は、鈴鹿大学に在籍している学生を始めとした、年齢・所属を問わない外国につながる人に対する間接的な母語学習支援として、2015年から母語・継承語スピーチ発表会を開催するに至った経緯とその意義、これまでの実施についての報告である。

2. 鈴鹿大学の外国につながる学生と母語学習支援

まず、鈴鹿大学に在籍する、外国につながる学生と留学生の特徴を概観してみよう。

外国につながる学生と留学生の違いが明確なのは、滞日期間である。鈴鹿大学に在籍する外国人学生の日本語学習環境について調査した舟橋・棧敷(2014)によると、留学生の場合、その76%が滞日歴5年未満であるのに対し、外国につながる学生は70%が滞日歴8年以上である。舟橋・棧敷は、外国につながる学生の方が日本語能力の自己評価、自身の日本語能力に対する満足度は高いが、ノートテイキング、論文作成、専門書の理解など、いわゆるアカデミック・ジャパニーズの理解と産出、敬語を使った目上の人との雑談などフォーマルな場面での会話に困難を感じる者が少なくないとしている。これは、留学生の大学における言語生活での困難点とも共通しており、日本語科目においてはこれらを学習項目に組み入れて、外国につながる学生と留学生がともに学んでいる。

2.1. 外国につながる学生の特徴

外国につながる学生が日本語科目の学習において見せた特徴を、留学生のそれと比較してまとめたものを表1に示す。

表1 外国につながる学生と留学生の特徴

項目	外国につながる学生	留学生
習得方法	自然習得（帰納的学習）	教室学習（演繹的学習）
理解	トップダウン型 聞き取りは得意 漢字が苦手（漢語を避ける傾向）	ボトムアップ型 聞き取りは得意（非漢字圏） 聞き取りは苦手（漢字圏） →漢字で書けば理解できる
「話すこと」に対する不安	強い場合が目立つ 相手の反応が気になる	個人差あり 発話の正誤が気になる
母国との関係	家族と同居 母国との往来は頻繁ではない	母国に家族がいる 家族・親族と離れているが密に繋がっている

（舟橋 2016 より）

外国につながる学生は、主に日常生活において日本語を自然習得している。漢語が頻出する文脈は苦手とする傾向はあるものの、日本語の文脈の大意をつかむことに慣れており、円滑なコミュニケーションを行うことができているように見える。

舟橋 宏代, 外国につながる人の母語学習とその支援

しかし、外国につながる学生は、留学生と同様、積極的に明るくふるまっても、話すことに対する不安が強い場合が目立つ。留学生の場合、その不安は「文法的に間違っただけを言うのではないか」という点に集中しているのに対し、外国につながる学生の場合は、自分の言ったことに対する相手の反応に不安を感じているようである。

舟橋 2016 は、日本語会話の課題である自己評価レポートから外国につながる学生の持つ不安について報告している。そこには、滞日 12 年、流暢な発音とこなれた話し方をする外国につながる学生が、「4 月（大学に入学した）頃は、先生とコミュニケーションを取るのも難しかったです」としている例があげられている。また、別の学生は、学習意欲が高く、論述力にすぐれて自信に満ちた学習者のように見えるにも関わらず、「まだ私は緊張で言葉が詰まったりして、顔を上げてあまり話すことができていません」、「自分から積極的に話を切り出したりすることはできません。いつも、誰かが最初に話を切り出さない限り、私は喋ることができません」と意識していることが報告されている。外国につながる学生は、日常生活の中で困難を感じないほどの日本語運用能力を身につけてはいても、依然として日本語を用いたコミュニケーションに緊張を伴い、十分に自己表現できないと感じている者が少なくない。自分自身を自由に、思った通りに表現できる母語で自己表現する機会を設けたいと考えた。

外国につながる学生と留学生が決定的に違うのは、母国との関係である。ほとんどの留学生は母国の家族と離れて暮らしているが、家族とは心理的に密につながっており、家族は懐かしく思い出す、心の支えになる存在である。一方、外国につながる学生のほとんどは家族と同居しており、母国との往来は頻繁ではない。家庭内には母国の文化があっても、幼少時に来日して以来、母国での経験は短期間の訪問だけの者もいれば、中には物心ついてから一度も母国を訪問したことがない者もいる。日本文化のある一側面を自国の文化と比較させようとした時、外国につながる学生の中には、自国の文化がわからず意気消沈してしまう者もいる。

そして、外国につながる学生にとっては、家族が心の支えとなっている面もあるが、日本語や日本社会に対する理解が十分ではない家族とのコミュニケーションに齟齬が生じることもあるという。ある学生は、日本語があまりわからない両親と日本語のバラエティー番組を見ると、両親の理解できない日本語表現の通訳を求められることにうんざりしている。その学生は、日本の社会派ドラマが好きなのであるが、両親が日本のバラエティー番組を見たがるので我慢してつきあっている。実は両親も母国の社会派ドラマが好きなのであるが、日本のドラマは理解することができず、子どもと一緒に見る日本語の番組はバラエティーになってしまう。子どもである学生も両親とともに母国の社会派ドラマを見ればいいのだが、母国における社会経験を含む、母語での経験に乏しく、ドラマを楽しむことができないようであった。

鈴鹿市内に住むブラジル人 257 人の、日本語理解度や日本社会における問題および意識

を調査した、多文化共生に関する意識調査検討委員会(2011)によると、通常の日本語会話に困らないと解答したのは、19歳以下の世代で83.3%、親世代である30代で42.9%、40代で56.2%と、まずまずのように見える。しかし、学校や職場、行政、地域の通知文書等を読んで理解できるのは、19歳以下で50%なのに対し、親世代である30代は8.6%、40代は10.1%に過ぎない。それでも、日常生活の困り事として「日本語が理解できない」をあげた人は14%に過ぎず、「困っていることはない」とした人が25.7%を占める。日本語の文書が理解できない30代40代の90%が、日本語の文書を理解する19歳以下の50%に頼っている現実が垣間見える。

このように、外国につながる学生は、日本語の運用能力が十分ではない親世代と日本社会をつなぐ役割を果たしているのだが、日本の社会事情に疎い家長の決定に反感を感じながら、自分を抑えて従わなければならない、そこから家庭内で不協和音が生じることもある。親世代が日本語、日本事情に通じていないことに焦点が当たりがちであるが、子ども世代である外国につながる学生の母語運用能力が、「聞く」という受容的な活動には問題がなくても、矛盾点を解決するように十分に「話す」経験に乏しいことも問題の根底にはあるのではないだろうか。

このような事情から、外国につながる学生に対する母語学習支援を行いたいと考えるようになった。

2.2.母語学習支援の意義

母語学習は家庭でなされるべきであり、家庭で母語による会話をしていればよいではないかという声もあるかもしれない。しかし、外国において母語の運用能力を消失させず保持していくのは、それほど容易なことではない。

カミンズ(2011:67)によると、母語をよく使うコミュニティが存在しないか、一定地域に分離された状況では、2〜3年で母語によるコミュニケーション能力を失うのが通例であるという。さらにカミンズは、聞いて理解する受容面の言語能力は保持できても、自ら話す産出面では、友人や兄弟、両親に対してもマジョリティ言語を使うようになり、親子の言語のギャップは感情の亀裂となって、子どもは家庭文化からも学校文化からも疎外される結果になってしまうという。

外国につながる学生は、両親が早朝から出勤したり、夜勤があつたりする場合が多く、週末は家族で過ごすことが多いとはいえ、日常的にゆっくり会話できる環境があるとはいえない。親たちも、長時間の勤務で疲れ切った体を休めるべき夜の時間に、子弟の母語教育を行う時間を割くのがどれほど困難なことかは想像に難くない。

その一方、学校での使用言語は日本語に限られている。1日も早く日本語が話せるように、学校に慣れるようにと日本語の使用が促される。これが子どもにとって自身の母語と母文化、すなわち自身のアイデンティティの否定と感じられると、子どもは積極的かつ自

信を持ってクラスに参加しようとはしなくなるという（カミンズ 2011:68）。カミンズによると、言語と文化の多様性を「ただ容認する」という受け身の姿勢では不十分であり、「多様な言語的、文化的体験を持つ子どもの全人格が前向きに容認され、正当化される教室環境を作り出す必要がある」としている。母語学習を支援することにより、大学は多様な背景を持つ学生のアイデンティティを認め、受け容れて、さらなる成長のために尽力する姿勢を示したいと考えた。

2.3.母語学習支援の方法

外国につながる学生の母語学習を支援する直接的な方法は、母語を学習するための科目をカリキュラム上に設置することである。しかし、外国につながる学生の母語は一つだけではない。そして、多くの学生が母語とする言語を学習する科目のみを開設した場合、少数言語を母語とする学生との間に不公平が生じる恐れがある。そのため、母語学習科目設置という直接的支援方法をとることは不可能である。打開策を模索していたところ、大阪で母語によるスピーチ大会が開かれているという情報を得た。

大阪府立学校在日外国人教育研究会は、1年に2回、「WaiWai! トーク」という、外国にルーツを持つ高校生の母語によるスピーチ大会を開催している。発表は学年別の部に分かれており、発表の後は交流会が開かれ、講評の後に表彰式となっている。何年に第1回が行われたのか不明であるが、2017年1月には第15回 WaiWai! トーク Part2 発表会が、2017年6月には第16回 WaiWai! トーク Part1 発表会が開催されており、少なくとも近年は年2回開催されているようである。

さらに大阪では、大阪市教育委員会が中学生を対象とした母語スピーチ大会である多文化スピーチ大会「ワールドトーク」を国際理解教育推進事業として開催している。2017年9月には第13回が開催され、大阪市内の中学から50名近い外国につながる生徒たちがスピーチを発表している。

母語によるスピーチ大会として、その他には、公益財団法人浜松国際交流協会が行っているポルトガル語スピーチコンテストに、日本の学校に通っている母語話者、ブラジル学校に通っている母語話者の部門が存在する。これは、主催こそ浜松国際交流協会になっているが、母語話者が出場する部門の申込先は在浜松ブラジル総領事館となっており、ブラジルの国策である母語教育の成果を確認する場ともなっている。

管見によれば、本学で母語・継承語スピーチ発表会を開催する以前に存在していた母語によるスピーチ大会は、いずれも公的機関が主催の以上三大会だけである。日程が合わず、見学に行くこともできなかったが、鈴鹿大学は1997年より外国人日本語スピーチコンテストを毎年開催しており、その経験より、母語によるスピーチ発表会の開催も可能であろうと推測された。1人1人に参加賞が出ること、出場者の中から2名の受賞者が選ばれ楯が贈られること、母語によるスピーチの背景には、日本語の字幕が出ること、という数少

ない情報を頼りに、鈴鹿大学でできる規模のスピーチ発表会を開き、スピーチを準備する過程を支援し、発表する場を設けることで、外国につながる学生、外国につながる人に対する母語学習を間接的に支援していくことを決めたのである。

3. 外国につながる人の母語・継承語スピーチ発表会が目指すもの

外国につながる人の母語・継承語スピーチ発表会を企画するに当たり、外国につながる学生、外国につながる人の母語学習を間接的に支援するための設定を行った。どのような目的で、どのような設定をしたのか、「募集要項」と「スピーチ作成」⁽⁴⁾の該当する項目を見てみよう。

3.1. 母語学習を間接的に支援する仕掛け

それぞれの項目の目的や狙い、配慮、意図されていることは以下の通りである。

3.1.1. タイトル「外国につながる人の母語・継承語スピーチ発表会」について

(1) 「母語・継承語」のスピーチであること

「母語」だけではなく、あえて「継承語」も併記した。「継承語」というのは、親から継承した言語、すなわち親の母語のことである。幼少時に来日、または日本生育の場合、親の母語がすなわち子どもの母語とは言えない場合がある。たとえば、日本語が母語となってしまう、両親の母語は日常の簡単な会話を理解できるが話せない場合、それは子どもにとっての母語とは言えないが、継承語である。「継承語」の併記により、両親、あるいはそのどちらかと母語が異なる人までをスピーチ発表者として幅を広げることを企図した。

(2) 「コンテスト」ではなく、「発表会」であること

順位を競うことを第一にするのではなく、それぞれの心のうちを母語・継承語で発表しあうことを主目的とした。そのため、全員に賞状を渡し、1人ひとりに講評を伝え、花束を手渡すことにした。

3.1.2. 内容・テーマについてースピーチ作成のてびきー

スピーチのテーマの例や、内容を準備する手順については、「スピーチ作成のてびき」に詳述されている。

(1) 募集要項・スピーチ作成のてびきを多言語にて作成

募集要項とスピーチ作成のてびきは、日本語以外に、英語・フィリピン語・ポルトガル語・スペイン語・中国語・ベトナム語で作成され、日本語を理解しないが、母語の支援をしてくれる大人とともにスピーチを準備できるようになっている。翻訳作業は、鈴鹿大学の教員や、2017年度の共催団体である鈴鹿国際交流協会職員その他、鈴鹿大学に在籍する外国につながる学生、留学生が行っている。外国につながる学生は、スピーチ発表者として参加することもできるが、このように、自身の持つ言語能力で行事の運営に貢献できるこ

とを体得してほしいと考えている。

(2) スピーチ原稿の作成を支援

スピーチ作成のてびきで示されている作成の手順は、大学の授業でスピーチ原稿作成の支援をする際の指導手順と同一である。スピーチ原稿を、「スピーチ作成のてびき」にしたがって作成することで、指導を受けて作成するのに近い出来映えのものに仕上げられることが期待されている。

3.1.3. 応募資格について

当初、年齢制限を設けることも考えたが、競い合うことが目的ではない上、学ぶことに年齢は関係なく、多様な出場者が集まることに意義があると考えたため、三重県下在住・在勤で日本語を母語としない、または家庭内言語が日本語以外の方とし、年齢、国籍は問わず、日本国籍保持者も排除しないこととした。

3.1.4. スピーチ原稿について

(1) 対訳形式にして、日本語字幕として利用

スピーチ原稿は、A4版に母語・継承語でタイトル、名前、本文の順に入力し、その下に日本語の対訳タイトル、日本語表記氏名、本文の順でファイルを作成して提出することになっている。スピーチ発表会当日は、日本語部分をプロジェクターに映し出し、字幕として利用する。

(2) 応募後の原稿を母語指導

応募原稿は、鈴鹿大学教員や、教育機関を中心に日本社会で活躍する母語話者が母語指導を行う。指導方法は、担当者や応募者の希望により多少異なるが、自然で適切な文脈になるよう添削以上の指導が行われるため、発表前に文法的な誤りや語の用法のずれなどは修正でき、自信を持って発表することができる。

3.1.5. 審査基準の提示

募集要項に審査基準の概略が、さらにスピーチ作成のてびきには、実際に審査で用いられる審査基準のルブリックが記載されている。このルブリックの最高得点欄は、「よいスピーチ」の特徴を記述したものであり、それに沿うように準備をするよう発表者を導くものである。

発表者の母語はまちまちであり、審査員はそれぞれの母語に堪能であることは求められていない。審査基準は①題（タイトル）、②内容・構成、③声の大きさ・声の出し方、④発音・聞きやすさ、⑤話し方・態度からなり、③～⑤がそれぞれ①②の倍の得点となっている。つまり、完全にパフォーマンス重視の採点が行われる。長年スピーチコンテストに立ち会ってきて、どんなに内容がよくても小さい声、感情を伝えない話し方、自信のない態

度では評価されないことは身にしみている。逆に、パフォーマンスが達者であれば、内容が薄くても、多少支離滅裂でも評価される様子も見てきた。自分の言っていることが間違いではないか、相手にどう思われるのかとびくびくして声が小さくなったり、下を向いたりするより、大きな声で堂々と話す方が伝わりやすく、高評価を得ることができるのだということを、この審査基準を通して伝えたい。

4. 外国につながる人の母語・継承語スピーチ発表会が見せてくれたもの

外国につながる人の母語・継承語スピーチ発表会は、2015年からこれまで2回開催されている。その概要について表2に示す。

表2 外国につながる人の母語・継承語スピーチ発表会実施概要

開催時期	参加者(母語・所属・人数)
2015年 第1回 10月(大学祭)	発表者 6名、聴衆約30名 母語別: 英語1名、タガログ語3名、ポルトガル語2名 所属別: 社会人1名、大学生2名、高校生3名
2016年 第2回 11月第1土曜日	発表者 10名、聴衆約35名 母語別: 英語4名、ポルトガル語2名、タガログ語2名、モンゴル語1名、中国語1名 所属別: 大学生1名、高校生6名、中学生2名、小学生1名

2回の実施で、発表者も聴衆も少しずつ増えた。

第1回と第2回を比較してみると、変化がみられる。第2回の特徴は以下の通りである。

まず、継承語としてモンゴル語のスピーチを発表した小学生、中国語のスピーチを発表した中学生が登場したことである。モンゴル語の発表者は、鈴鹿市内で立ち上げられたモンゴル語母語教室に通っており、母語教室の小さい子どもたちとともにスピーチの後アトラクションで歌を披露してくれている。

次に、高校生の発表者がまとまった数となり、発表会終了後の会場は、笑顔あふれる交流会となっていたことである。人数が増えたことにより、場の空気を高校生の活力が明るく、軽くする作用が見られたようである。

そして、2回目の大きな特徴としては、発表者のつきそいではない、日本人の聴衆が複数存在したことである。午前中に大学内で行われた別のイベントに参加してこの発表会を知り、午後にも参加してくれた方々である。母語のスピーチに興味を持ち、会場の前で発表者を見守っていてくれたことで、会場が和み、温かい空気が醸成されていたように思う。発表者たちが前向きに努力している姿に聴衆は感動し、聴衆が熱心に耳を傾けてくれる姿に発表者は励まされ、母語・継承語による自己表現が受け容れられる体験を得たよ

うである。発表者は話す側、聴衆は聞く側であっても、そこには一方通行と断ずることはできない、心の交流が生まれていたのではないだろうか。母語・継承語スピーチ発表会はこのような場となりうるものなのである。

5. おわりに

外国につながる人の母語学習を間接的に支援するために母語・継承語スピーチ発表会を開催することになった経緯と、間接的支援の仕掛けについて述べ、実施により見えてきたものの一部を報告した。しかし、それが何をもたらし、どのように発展していけばよいのかについては、筆者にとって未知の領域である。発表者にとって、また聴衆にとって、大学にとって、地域にとって、より心地よく、実り多いものにしていく努力を重ねながら模索していきたい。

謝辞

母語・継承語スピーチ発表会を助成事業として開催を後押しし、2017年度は共催団体として支えてくださっている鈴鹿国際交流協会、母語・継承語スピーチ発表会を含む複数のイベントを「多文化地域交流フェスタ 2017」という留学生地域交流事業として助成し、ご支援いただいている公益財団法人中島記念国際交流財団、独立行政法人日本学生支援機構、三重県および鈴鹿市の関係者のみなさま、そしてすべての参加者のみなさまに心より御礼申し上げます。

注

- (1) 三重県環境生活部ダイバーシティ社会推進課多文化共生班発表資料による。法務省入国管理局報道発表資料では三重県の在留外国人数 4 万 44913 人、構成比 1.9%とある。
- (2) 2017 年 5 月 1 日現在の在学生数
- (3) 舟橋(2016)による
- (4) 第 3 回外国につながる人の母語・継承語スピーチ発表会の「募集要項」と「スピーチ作成のてびき」(https://www.suzuka-iu.ac.jp/event_info/201708301-50/ 2017 年 10 月 2 日最終閲覧)を参照のこと。

引用文献

- (1) カミンズ, ジム(2011)『言語マイノリティを支える教育』中島和子訳、慶應義塾大学出版会
- (2) 多文化共生に関する意識調査検討委員会(2011)『鈴鹿市における多文化共生に関する意識調査』社会福祉法人鈴鹿市社会福祉協議会
- (3) 舟橋宏代・棧敷まゆみ(2013)「2013 年度鈴鹿国際大学外国人日本語環境実態調査」

『鈴鹿国際大学紀要 CAMPANA』No. 20, 鈴鹿国際大学

- (4) 舟橋宏代(2016)「外国につながる学生が留学生とともに学ぶ場のデザイナー大学における日本語学習支援のあり方」2016年WEB版『日本語教育実践研究フォーラム報告』、
日本語教育学会(http://www.nkg.or.jp/wp/wp-content/uploads/2016/12/2016_SAfunahashi.pdf 2017年10月1日最終閲覧)

引用資料

- (1) フランクフルト継承日本語教室『陽だまり』
(<https://hidamari-frankfurt.jimdo.com/> 2017年10月2日最終閲覧)
- (2) 法務省入国管理局平成29年3月17日報道発表資料
「平成28年末現在における在留外国人数について（確定値）」
(http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00065.html
2017年9月28日最終閲覧)
- (3) 三重県環境生活部ダイバーシティ社会推進課多文化共生班平成29年3月1日付
「外国人住民国籍・地域別人口調査（平成28年12月31日現在）の結果」
(<http://www.pref.mie.lg.jp/TOPICS/m0012100025.htm> 2017年9月28日最終閲覧)

国際人間科学部 funahahi@m.suzuka-iu.ac.jp

**Supporting Mother Tongue Learning
for New Comer Students
— The Aims of a Speech Recital in Mother Tongues
or Heritage Languages —**

Hiroyo FUNAHASHI

